

# 草を分けて

小川未明

青空文庫



兄にいさんの打うった球たまが、やぶの中なかへ飛とび込こむたびに辰夫たつおくんは、草くさを分わけてそれを拾ひろわせられたのです。

「なんでも、あのあたりだよ。」と、兄あにの政二まさじくんは指図さしずをしておいて、自分じぶんは、またお友ともたちとほかの球たまで野球やきゅうをつづけていました。

「困こまったなあ。」と、思おもつても、しかたがなかったので、辰夫たつおくんは、しげった草くさを分わけて、ボールをさがしにやぶの中なかへ入はいりました。

さつきまで、はるぜみが、どこかで鳴ないていました。その声こえが、ぴたりと止とまってしまいました。

「あの、やさしい声こえのはるぜみをつかまえないな。」と、思おもいました。そして、背せの高い草くさを分わけて、下したの方ほうを見ると、そこには、不思議ふしぎな、静しずかな緑みどりいろ色の世界せかいがあつて、土つちには、きれいな帽子ぼうしをかぶった茸たけがはえていますし、葉はの上うえには、花はなびらのついているように、珍めづらしい蛾がが休やすんでいますし、また生うまれたばかりの、おはぐろとんぼが、うすい、すきとおる羽はねをひらひらさして飛とんでいますし、青あおい、青あおい色いろをした、きりぎりすのような虫むしもいますし、よく見みると、名なを知らない草くさが、かわいらしい花はなを咲さかしたりしていま

した。

「きれいだなあ。」と、辰夫くんは、ボールを探すことも忘れて、はじめて気のついた、異った世界の景色に、うっとりで見とれたのです。そして、じつとそこにうずくまって、「僕も、お仲間に入れてくれない？」と、いいますと、蛾は相談をしにくのか、ちらちらと飛んで、あっちのしげみに入つてゆきました。すると、おはぐろとんぼも、あわてて逃げ出しそうにしましたから、

「僕は、生まれたばかりの、君なんかつかまへはしないよ。」と、辰夫くんは、おはぐろとんぼを呼びとめました。

おはぐろとんぼは、はじめて安心したように、大きな目をくるくるさせて、「いま、蛾さんが帰つてきますから、すしお待ちください。」と、いつて、自分は、大きな葉の蔭に姿を隠してしまいました。

たぶん、蛾がいつて相談したのであります。ジイー、ジイーといつて、すぐ近くで、はるぜみの鳴く声がしました。

「いいなあ、僕こんなところに、いつまでもじつとしていたいな。」と、辰夫くんは、思いました。そして、もう、ボールなど探しに入つて、この小さいお友だちを驚かしたりし

たくはなかつたのです。

このとき、兄の政二くんのかけてくる足音がして、

「辰夫、まだ見つからない？」と、いいましたので、辰夫くんは、

「見つからないよ。」と答えました。

「おかしいな。」と、いって、政二くんは、大きなくつで、草の上を遠慮なしに踏んで入ってきました。虫たちは、どんなに驚いたかしれません。たちまち大騒ぎとなりました。

「なければ、いいよ。もうお昼だから、お家へ帰ろう。」と、政二くんは、いって、やぶの中から出ました。辰夫くんも、つづいて出ました。

「兄さん、午後から釣りにいくの？」と辰夫くんはききました。

「いくかもしれない。」

「つれていってね。」

しかし兄さんはだまっていました。ご飯を食べてしまうと、政二くんは、釣りざおを出して用意をしました。

「兄さん、僕もつれていってね。」と、辰夫くんは、また頼んだのです。

「みみずを取つておいで、つれていつてやるから。」

辰夫くんは、すぐにみみずを取りにいきました。しばらくするとぼんやりと帰つてきて、「どこにも、みみずはいないよ。」と、いいました。

「じゃ、つれていかない。」と、政二くんがいました。

辰夫くんは、泣き出してしまいました。天気がつづいて、みみずのいそうなところを探してもいなかつたのでした。

さつきから、このようすを見ていたお姉さんは、

「なんで、そんな意地悪をするんですか。釣りにいくときは、道具をみんな小さな弟に持たせるくせに、機嫌よくつれていかれないのですか？」と、政二くんにおっしゃいました。「いつても、じきに帰るといふから、いやなのだよ。」と、政二くんは、答えました。

「うそだ、僕に、さおを一本も貸してくれないんだもの、僕つまらないから、帰るといつたんだよ。」

「なぜ、一本ぐらいさおを貸してやらないのです。」

「釣れはしないんだ。ただ、針を引っかけ糸を切ってしまうばかりだもの。」

こう、政二くんがいうと、辰夫くんは顔を赤くして、

「だれが、もうボールなど拾<sup>ひろ</sup>つてやるものか。」といいました。

「だれが、釣<sup>つ</sup>りになど、つれていつてやるものか。」と、政<sup>まさじ</sup>二くんがいました。

「辰<sup>たつお</sup>夫さん、つれていつてもらわなくても、晩<sup>ばん</sup>に、お姉<sup>ねえ</sup>さんが、夜<sup>よみせ</sup>店へつれていつてあげるから。」と、お姉<sup>ねえ</sup>さんがおつしやいました。

辰<sup>たつお</sup>夫さんの機<sup>きげん</sup>嫌は、すぐ<sup>なほ</sup>に直<sup>なほ</sup>つてしまいました。兄<sup>にい</sup>さんたちが、釣<sup>つ</sup>りにいつた後<sup>あと</sup>で、原<sup>はら</sup>つばで、ほかのお友<sup>とも</sup>だちと遊<sup>あそ</sup>びながら、晩<sup>ばん</sup>になるのを楽<sup>たの</sup>しみに待<sup>ま</sup>つていました。晩<sup>ばん</sup>になりました。政<sup>まさじ</sup>二くんはお姉<sup>ねえ</sup>さんと辰<sup>たつお</sup>夫くんが出<sup>で</sup>かけるのを見<sup>み</sup>ても、やせ我慢<sup>がまん</sup>をして、つれていつてくれといいませんでした。

「辰<sup>たつお</sup>夫、金<sup>きんぎよ</sup>魚を買<sup>か</sup>つてもらつてこいよ。」と、ただ一<sup>ひと</sup>言<sup>こと</sup>、政<sup>まさじ</sup>二くんは、いつたきりです。

辰<sup>たつお</sup>夫くんとお姉<sup>ねえ</sup>さんは、明<sup>あか</sup>るい金<sup>きんぎよ</sup>魚屋の前<sup>まえ</sup>へ立<sup>た</sup>ちました。たくさんの色<sup>いろ</sup>とりどりの金<sup>き</sup>魚<sup>ぎよ</sup>が浅<sup>あさ</sup>いおけの中<sup>なか</sup>で泳<sup>およ</sup>いでいました。

「まあきれいなこと。」と、お姉<sup>ねえ</sup>さんはおつしやいました。しかし、ほんとうなら、日<sup>ひ</sup>が暮<sup>く</sup>れると、すべての魚<sup>さかな</sup>たちは、水<sup>みず</sup>草の蔭<sup>かげ</sup>に隠<sup>かく</sup>れて、じつとして眠<sup>ねむ</sup>るのであるが、この金<sup>き</sup>魚<sup>ぎよ</sup>たちは電<sup>でん</sup>燈<sup>とう</sup>の光<sup>ひかり</sup>に照<sup>て</sup>らされて、子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>らの出<sup>だ</sup>す、さおの先<sup>さき</sup>についている針<sup>はり</sup>に追<sup>お</sup>いまわ

されているのでした。

「辰夫さん、あんたも釣つてごらんさい。」と、お姉さんはおつしやいました。

辰夫くんは、無理やりに、針の先にひっかけて、金魚を釣る気になれなかつたのです。

「かわいそうだもの、僕、金魚をほしくないよ。」といつて、辰夫くんは、その前から  
はなれたのでした。

「せつかくきて、つまらないじやないの、なにかほかのものを買つてあげましょうか。」  
と、お姉さんはおつしやいました。

二人は、並んだ店を見ながら、歩いていました。

「あれは、なんですか？」

「海ほおずきよ、きれいですね。」

「僕、あんなの、ほしいけど。」

「女の子の持つものよ。」

「買つては、おかしい？」

「おほほほ、ほしければ、私が買つてあげますから。」

「僕、ここに待っているよ。お姉さん、買つてきておくれ。」と、辰夫くんはいいました。



「まあ、恥はずかしがりやね、そんならここに待まっていらつしやい。」と、いつて、お姉ねえさんは、海うみほおずきを売うる店みせの前まえへいかれました。

辰夫たつおくんは、今日きょう、やぶの中なかで見みた、不思議ふしぎな世界せかいのことを思おもい出だしていました。

貝かいがらのような蛾が、赤あかい茸たけ、おはぐるとんぼ、いい声こえで唄うたをうたうはるぜみなど。そし

て、またこの海うみほおずき。なんといい美うつくしいことであろう。しかし、金魚きんぎよを買かわずに、

海うみほおずきを買かつて帰かえつたら、きつとお兄にいさんが笑わらうとは思おもつたけれど、辰夫たつおくんは、や

はり、金魚きんぎよをいじめたくなかったのです。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店

1936（昭和11）年12月

初出：「せうがく三年生 13巻3号」

1936（昭和11）年6月

※表題は底本では、「草《くさ》を分《わ》けて」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 草を分けて

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>